

さかのぼり調査の結果, EPEC144株と赤痢菌16株の計160株中4株 (2.5%)がEaと同定された。Ea4株の生化学的性状は文献と同様の性状であった。

また, 18薬剤の薬剤感受性は4株とも大半が感受性を示した。

一方, 環境水検体368検体からのPCR法の検出結果は各下痢原性大腸菌に比べEaの検出率は0.8%と低かった。環境水からのEaのPCR検出結果は, 小野らの報告と同様, 豚, 牛の保有傾向が示唆された。環境水からDHL寒天培地を用いた定法ではEaは分離できなかったことから環境分布調査のためのEa分離には, 選択増菌法や分離培地の開発が必要と思われた。

○大気汚染常時監視における二酸化硫黄高濃度事例について

・福地哲郎¹⁾, 岡田守道, 三角敏明, 中村公生

¹⁾ 元 宮崎県衛生環境研究所

「第41回九州衛生環境技術協議会

(平成27年10月8日 熊本市)」

平成25年度, 平成26年度の大気汚染常時監視において発生した二酸化硫黄の環境基準超過事例について, 原因等の解析を行った。延岡市, 日向市及び高千穂町で発生した環境基準超過は, いずれの事例も後方流跡線や阿蘇山の噴火状況等から阿蘇山が原因と推測された。阿蘇山で発生した二酸化硫黄の濃度分布シミュレーションを行った結果, 阿蘇山からの大気の流れにより直線型の分布と拡散型の分布であったことが推測された。宮崎市及び小林市で発生した環境基準超過は, いずれの事例も後方流跡線や桜島の噴火状況等から桜島が原因と推測された。桜島で発生した二酸化硫黄の濃度分布シミュレーションを行った結果, いずれの事例も直線型の分布であったと推測された。